

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第157号（2019年6月）

風に吹かれて（134）

白井啓治

・五月の風に迷走する吾が癌の奴め

言葉を紡ぐことで生計を立てて来た者の言う台詞ではないが、言葉の中には、よくぞこの響きと象形を持って生まれてきて来てくれたと感動させられたり、感謝の気持ちのこみ上げてくる言葉がある。漢字を輸入しそれを日本人独自の言葉文化として構築してきた芸術であろうと思っている。

癌の闘病生活に入っておよそ五ヶ月になるが、今この「癌」の漢字ほど忌まわしく憎らしい象形や響きを持った言葉はないのではないだろうかと思っている。自分が癌に侵されたことで余計にそう思ってしまうのだろうか、実に忌まわしく憎らしい文字と響きである。それこそ、良くぞ病ダレに品と山を当てて「ガン」と発音してくれたものかと感心しきりである。

スポーツメンタルトレーニングの本を書いていた頃、プロゴルファー志望の青年を預かり指導していたことがあった。そのプロゴルファーの卵に、スポーツの場に於ける言葉の選択の意義について何度も繰り返し話したことがあったが、とうとう理解が届かず、プロゴルファーにはなったものの賞金を稼いで生活を立てられるようには、なれな

かった。彼を指導しながらつくづくと思った。日本の体育指導者の勉強嫌いの御都合根性主義の実に多く、又その及ぼす害の大きさについてあまりにも無知すぎると。

今トッププロスポーツ選手の殆どがメンタルトレーナーやフィジカルトレーナーを付けて、チーム〇〇として日常を共にしている。ゴルフなどと違う、チーム戦である野球選手ですら、所属チームとは別に個人的〇〇チームとして競技生活を送っている。

言葉というのは、実に便利なもので、解析・説明の部分だけではなく、メンタルに作用し人間のパフォーマンスの良し悪しに多大な影響を与えてくれるのだから、吾お得意の「見上げたもんだよ屋根屋の禪」である。

言葉についてももう少し詳しく書いていきたいと思っていたのであるが、何せ憎つき癌の奴が悪さをして進ませてくれない。

6月2日より、また入院し、新たな治療段階に入るのであるがヤレヤレなことである。



ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

6月号より、当会報も14年目となります。全員が年々大きく重ねておりますが、もう少しもう少しと頑張っております皆様様の応援よろしくお願ひ申し上げます。

和牛経営が危ない

菅原茂美

◎和牛産業の現状…日本伝来のあのおいしい和牛が、世界に散りじりに広がり、古来の伝統が崩れそうであるという。これも知的財産権の散逸？しかし遺伝子は造った物ではないのだから、特許権の侵害には当たらないという。それゆえ家畜改良増殖法で海外移出を禁じてはいない。しかし家畜伝染病予防法には、海外との家畜や受精卵などの移出入は固く禁じているので、今回の中国への大量輸出はこちらの法律でストップ。中国と手を組んだ大阪の肉屋は、過去4度も上海で逮捕されており、今回もタツチの差で国内逮捕された。何十年もかけて進めた改良品種を、そうやすやすと安売りされてはたまつたもんじやない。今回発覚の原因は18年7月大阪の肉屋が、フェリーで凍結された和牛の受精卵と精液を持ち込んだのを上海の警察が逮捕したのがきっかけ。自分が儲かれば、国家的損失などどうでも良いとする根性が許せない。

ブドウのシャインマスカットも日本の農研機構が18年もかけて完成した超優れもの。日本で発売されると、直ちに中国でも栽培・販売。盗めるものなら何でも盗め…これが中国流。見下げたもので、日本のガードが甘すぎた。日本が知らぬ間に東南アジアで大々的に販売している。報道によると欧米では、商品に臭いや味付けした物が商標登録。日本も考えたらよい。中国人を見たら泥棒の筋金が入っていると覚悟すべきである。アメリカも中国により、知的財産権を50兆円相当、盗まれたと言って怒っている。

*

和牛とは①日本古来の黒毛和種②褐(あか)毛和種③日本短角種④無角和種の4種で日本で生まれ育った4種の和種を言う。これほどのものを愚かな日本人は、やすやす外国人に手渡すとはなるといふ呆れたことか。

さて日本の和牛の飼養戸数・頭数は、2003年22万1100戸で280万5000頭。18年4万8300戸で251万4000頭である。

この15年間で、戸数で8割減って、頭数で9割が残った。減った理由は後継者不足。

また品種の内訳は18年現在純粋の黒毛和種159万4000頭、褐色和種20万5400頭。1戸当たり子取り雌の数は2003年7、6頭、現在18年、9、8頭である。また外国での和牛の飼養頭数はオーストラリア25万頭、アメリカ5万頭。オーストラリアは熱烈な和牛最真国家である。それは1976年アメリカが日本から和牛を持ち出し、そこからカナダ、オーストラリアなどに広がり、それぞれの在来種と交雑し、混合和牛が莫大な数になった。安い労賃、豊富な飼料で日本は太刀打ちできない。

*

◎和牛の歴史的背景…日本の和牛の歴史は、仏教の影響や生類憐みの令で肉用としての牛肉は明治の初めまで殆ど関心を呼ばなかった。食肉用となつたのはごく最近で、元々は労役用として飼われたものである。終戦直後から、労乳肉兼用として改良されてきたが、乳はホルスタインに全く及ばず、肉用は西洋の肉専用種にとても及ばず、労役用は、トラックや耕運機の出現により、いざれあてにはならず。結局は、肉の美味しさが取り

えという事で肉専用に傾いていった。年間40万頭の肉用子牛は9か月齢でセリに出され、肉用素牛として飼育され30か月肥育し、枝肉となり、肉になるのは生まれて39か月齢。何事についても日本製品はその品質の良さが売り物。自動車は故障が少ないのが何よりも外国で、もてはやされる基本になっている。農家が4年かかった利益よりも、食肉業者の一瞬の取引利益の方が大きいのでは、農家はやる気がなくなる。これが後継者不足の最大の原因である。高品質の和牛は何が何でも守り通さねばならない。

牛肉の輸入自由化は、1991年に開始され、現在国内産は需要量の半分にも満たない。和種混合牛を大量輸入に任せている。後継者は経営が成り立てば、ないわけはない筈。あまりにも農家の手取りが少ないから、後継者が定着できない。黒牛不可欠。その確保に全力投球必要。

国内の体制確保にあらゆる努力が絶対必要。後継不足が耕作放棄を招き、飼料確保ができず輸入飼料に頼り、生産コストを高めている。こんな素晴らしい遺伝的資源を持ちながら、その維持ができないようでは、どこに政治があると言えるのか。91年に自由化反対で騒いだ憂いが、今そのまま現実となって降りかかっている。

農産物の輸出入に関し、日本が勝った話がありませんか。あつたら教えて欲しい。いつでも負け。完封負け。代わりに車が売れているかもしれないが、農業の惨敗ぶりには、目を覆いたくなる。農地は休耕。餌は悉く輸入。有り余っているのにコメ迄輸入させられている。まして努力した品種改良は、皆その技術を盗まれる。農水省関連外交は弱すぎる。農業を見捨てた日本経済の行く末が思いやられる。

◎日本農業の立て直し *

日本の農産物自給率は、17年度現在カリロベースで38%である。という事は、スーパーに並んでいる商品の62%は外国産であるという意味ではない。実際の外国産は、34%であり国内産品は66%である。この辺が数字のマジックであり、カリロの低い野菜などはいくら多く並んでいてもカリロベースの自給率は上がらない。実際の肉類の自給率は、牛肉は44%、豚肉は51%、鶏肉は69%である。平均すれば肉類の自給率は66.7%、要するに3分の2は国産物である。しかし味噌、豆腐、納豆など需要の多い大豆の自給率は、わずかに26%である。

さてそれでは他国の食糧自給率は、高い順ではカナダ26.4%、アメリカ23.0%、オーストラリア22.3%、フランス12.7%、ドイツ9.5%、中位は、イギリス6.3%、イタリア6.0%、スイス5.1%、低い順は韓国3.9%、日本3.8%である。いざとなれば日本、韓国は世界を前に大きい顔はできない。こんな自給率では何事かあれば兵糧攻めなど食らえば、グーの音も出ないだろう。ならば自給率100%なら安全かと言えどこいそうは問屋が卸さない。お隣の北朝鮮を見るがよい。北朝鮮は食糧自給率100%でも国内事情は火の車。餓死者が多数出ているというから。南北朝鮮と、日本の食糧自給率が向上しない事には、万事順調とはいかない。物事はまず食糧の安定供給こそ第一義と考える。物立交渉で常に日本は酷い仕打ちを食らってきた。もつと大きい態度で交渉できるのに：と地団太を踏む事情がいつもある。

終戦直後、日本はアメリカの余剰農産物を否が応でも買わされてきた。小麦など、自給率14%、

大豆26%迄下げさせられたのには時の政府関係者になんの力があつたと言えるのか。とにかく自給率を抑えておけばグーの音も出ない。終戦直後子供ながら誰の宣伝か知らないが、コメのみ食べていると頭がますます悪くなる。その点小麦のパンを食べれば、非常に頭が良くなる：と云うコマシヤルを聞かされた記憶がある。子どもとは言え、まともに聞かされた記憶がなかったが、酷いことを抜かすものだと思えられた経験がある。

*

◎国産品の自給率・これを上げるにはどうすればよいか。食糧の自給率を向上させる一番の手段は、肉類の自給率を高める事である。肉類の自給率は牛肉44%、豚肉51%、鶏肉69%である。大雑把に言えば肉類の自給率は半分である。しかも飼料である穀物の輸入を考えればこの自給率は、物凄く低下することになる。何もかも根つこの部分で抑えつけられている。主たる相手国はアメリカである。自動車で譲歩しているのだからせめて穀物で譲れ!!これがアメリカ流外交手段である。トランプ氏も農家の票が大きいことは充分承知のはず。その為に日本の農家が泣かされている。安倍首相もトランプ氏とゴルフするのもよいけれど、国内でアメリカの牛肉に押され、後継ぎがなく、牛肉農家が次次廃業している現実を、ゴルフの余談として強く訴えてほしい。ところが逆にトランプ氏は早速農産物市場開放を真先に申し入れてきたという。

そもそも日本が、米国などの余剰農産物を買わされているが、生産過剰の米国の穀物を決して安くはない値段で買わされている。もし日本がこれを買わなければ発展途上国に流れ、彼らの生活

改善に大いに役立つはず。という事は日本が世界の穀物を買わなければ、アフリカの最貧民家族が救われるのを日本が邪魔している事にもなる。道義的に見ても、余剰農産物を日本に押し付けている国々とそれを『はいはい解かりました』とばかりにすぐ購入する日本は、云わば犯罪者と言えなくもない。経済戦争に巻き込まれている発展途上国の最貧民国を救うためにも、日本の自給率向上は重要なことである。

さてその自給率向上の為、否、和牛の自給率を高めるために今、何をすればよいか？ 答えは簡単ではないが都会に出た子弟がUターンして農家に帰り、豊かに存在する農地を有効活用することである。農地は何かを生産したくて、うずうずして待っていると思う。私が若かったら本当に帰農したいと思う。国の制度改革により農協組織の改革などにより利用法はいくらでも存在するはずである。何しろ都会のスーパーストアに並ぶ商品の4割もが外国産なんだからそれを国産品陳列に置き換えられたら農業の生きる道はまだあると考えられる。

*

◎農地の意味・農地というものは、単なる農産物生産のための土地というものではない。工業進展のために、農家が犠牲となり、後継ぎがなく農家が減少していく。耕作放棄の農地がむやみやたら増えていく。これがこれまでの日本政府が取ってきた政策である。農家の犠牲はこれだけではない。農家の労働力が、都会の労働力に吸収されていく。現在の「農地法」に縛られ、終戦直後の農地保護の固い政策である農地法で、家を守る原則が強く農地は耕作放棄の土地でも、他に転換でき

ない荒れ放題で放棄されていく。こんな犠牲はたまったもんじゃない。そして今、主に都会で地球温暖化を促している二酸化炭素(CO₂)を輩出しているが、それを吸収してくれる農作物を荒れ放題にしていると、害虫が沸きだしたり、アレルギーを引き起こす花粉を撒き散らしたり、火災の原因になったりする。それがしつかり農地が耕作されていけば、農産物が収穫できると同時に、CO₂吸収のため、温暖化防止にも役立つ事にもなる。農地は単に農業保護のみではなく、農地の保護は、人類生存に繋がる重大な役目を果たしているのである。より大きな地球環境保護に役立っているのだから、それゆえ国は大きな予算を使っても、農地は保存しなければならない。休耕を許すな!!

*

◎和牛の能力検定・和牛の優れた能力を永久保存するために、「後代検定」という検定の方法がある。全国の各研究機関などで専ら用いられる検定方法である。それはこの種牛は優れた遺伝能力を持っているかどうかを、その子や孫の能力で、折り紙をつけていく方法である。その子や孫が優れた能力を発揮すれば、その親或いは爺さんが優れた遺伝能力を持つていることの証明となる。それは母系についても言える事なので、両系統とも最優秀であれば、子孫に優れた能力を発揮するものが出てくる確率が高くなる。そのような両性の優れたもの同士の受精卵を多数造り、一般のメス牛に受精卵移植すると、母が平凡でも最優秀夫妻から生まれたことになる。従って、後代検定に落第すれば種牛名簿から削除され、合格すれば永遠に種牛として君臨する。多くの精液や受精卵が永久保存される。この繰り返しで本県でも基礎を固める

ことができる。こうしてできたのが本県では「常陸牛」であり、豚ではローズポークである。このテストの合格率は極めて低く、合格すれば半永久的に繁殖の基礎台帳に載る。この方法を人間で行おうとしたのがヒットラーの人種改良計画であり、ユダヤ人が大量に殺された。優れた者ばかりで国家が運営されたらどんな国家が生まれる事やら想像もつかない。平凡や秀才が入り混じっているからこそ、バラエティに富み世の中が面白くなる。検定に關与した獣医師として、しみじみ牛に生まれてこなくてよかつたと思う。

*

◎和牛保護政策

オーストラリアは和牛の礼賛国である。アメリカ経由で手に入れた和牛の種を今、最も大事にしているのはオーストラリアである。アメリカでもオーストラリアでも、レストランでステーキを注文すれば、それは巨大なステーキが、ドンと出てくる。しかしそれは和牛の成分がかなり高いものであれば、腹いっぱいおいしい牛肉をいただくことになるが、現地の従来からの国産品であったなら、とてもとても食べたものじゃない。それが50%でも和牛の遺伝子が入っていれば、非常に満足のいく食事という事になる。とにかくあのステーキの大きさは半端じゃない。草鞋を齧っているようだとの声もある。

そんなわけで、外国と太刀打ちできるのは、あくまでも品質の確保である。政府のしつかりした政策のもとに和牛生産体制を守ることである。別に政府の援助がなくとも、利益の配分が生産者・中継ぎ業者、販売店とも均等に配分されれば、農家は何とか後継ぎができ、生産は確保される。

農家の生産費の内、最も大きな位置を占めるのが飼料費である。飼料で最も重大なのが穀物である。穀物は人がそのまま食べれば10人が生きていけるのに、これをいったん家畜の肉にして食べれば、酷ければ一人しか生きていけない。工夫改善しても、飼料効率改善にも限度があるので、あと2〜3割改善できたにしても二人ぐらいしか生きていけない事になる。飼料の中で次に大事なものは新鮮な青草である。畑には、税金をかけるどころか逆に、地球環境保護に当たるという意味も兼ね、むしろ補助金さえ必要と考える。農家の過剰保護というかもしれないが、環境保護という立場からも休耕地などできないよう、畑は存分に活用されるべき。

日本人の体格改善という意味からも、動物蛋白質はもつと多く活用されるべきである。学校給食からして、蛋白質の多級は絶対必要。生涯の健康管理の基礎は、まずもって児童生徒の蛋白質多級は絶対必要な基礎である。日本の昔からの食生活改善は他の諸々考えて今、緊急を要する項目と考えることであり、スポーツにしろ、企業の労働力にしろ、牛肉とは限らないが動物蛋白質がいかに重要かがはつきりしている。国民のしつかりした意識改革がぜひ必要。



【石岡市内の社寺紹介】 平福寺

春林山平福寺(曹洞宗 本尊…如意輪観音)は常陸大掾氏の菩提寺として知られている。富田北向観音堂の裏手になる。



常陸大掾氏墓所(史跡)

JR石岡駅の名所案内にこの平福寺が載っていてそこには「常陸大掾氏歴代の墓」というような説明がついていたように思う。これも最近近は駅ホームでの案内板などを見る機会が大分減ってしまったので記憶のみだ。以前の寺の紹介をブログで書いたことがあるが、その時にタイトルとして「平家の福を願う寺」とつけた記憶がある。確かに名前からして常陸大掾氏⇨平氏であるのでそのような印象を持ったのだ。

寺の境内中央に柵で囲まれた五輪塔が林立した墓所は、中央にあるのが全高1.8mの最大の五輪塔で、それをとり囲むように3方周囲に

は、14基の五輪塔が並んでいる。これらの五輪塔は、平安時代から戦国時代まで、常陸国に勢力を誇った豪族、常陸大掾氏代々の墓塔といわれている。

天正18年(1590)、佐竹軍勢に攻められた府中城最後の城主となった大掾清幹は、ようやく城が炎上する中を、この平福寺まで落ち延び、府中城を佐竹側に引渡し平福寺内で自害したとも伝えられるが城で討ち死にしたとの話もあり定かではない。

「新編常陸国誌」(1888年)の記述をもとに、真中の塔が国香の墓だという解釈もあるが、時代背景などを考えると平将門に殺された国香の墓があるというのは地理的には少し無理があるように思われる。寺伝では寺は、平国香により建立されたと伝えられるが、この地に建てられたのはもう少し後だろう。恐らく鎌倉時代になり大掾職を継いだ水戸にいた一族の吉田氏(馬場氏)以降の墓であると考えた方が素直なのではないだろうか。

女性天皇「孝謙上皇」が建立した(765年)奈良の西大寺には末寺にこの平福寺の名前があるといわれており、また西大寺には日本最古といわれる五輪塔が残されている。

この西大寺は当時力を持っていた僧、弓削道鏡の考えて建立されたと言われ、この道鏡が天皇失墜で都を追われて下野国へやってきたとされるが、一部ではこの府中の地にやって来て子孫を残したなども噂されている。ここ府中の中世の六名家として、税所(さいしよ)・健児所・香丸・金丸・中宮部・弓削(ゆげ)の名前があり、この弓削氏と道鏡の関係が明らかではないが、とても興味深い。

またこの寺は、かつて石岡(府中)の五大寺(不動院・龍光寺・千手院・照光寺・平福寺)の一つに数えられていた。

平福寺の文化財として、桐材で作られた円空作の「大黒天像」(高さ31cm)があるのも興味を引く。

鈴ノ宮稲荷神社

駅前八間道路より左(南)に一つ入った通り国府2丁目にある。街中の普通の神社(お稲荷さん)という趣であるが、幕末の天狗等が最初に決起してここから出立したことで知られる。



元治元年(1864年)3月27日、藤田小四郎ら天狗党総勢63名は、ここ鈴ノ宮稲荷神社の境内に集合し、成功を祈願。ときの声をあげ、筑波山に向けて出立したという。『筑波義挙発祥の地』と記されている
神社の隣の空き地(現在は駐車場)は、昔新地

八軒（紀州屋、金柘屋など）といわれた遊郭があった。天狗党の藤田小四郎や竹内百太郎たちはこの遊郭を定宿としていた。特にその中の紀州屋の女将「いく」は天狗党に「おふくろ」と慕われていたという。天狗党は幕末の行き詰まりから水戸藩内部の抗争に端を発しているが、民家を焼き討ちした過激派ばかりではなく、尊攘運動が時代変革を必要としていたことによると考えられている。紀州屋いくの墓は本浄寺にあるというがまだ私は確認していない。

天狗党事件と石岡地方の民衆との関係は上州勢が加わってから変わっていった。この上州勢は筑波山にとどまっていたが、壬生・宇都宮藩などによる幕府側の追討勢力のため、筑波山を下山し、府中国分寺などに対陣していた。一方柿岡などの農民が波付岩近くでこれに対抗するために集結した。これを上州勢が焼討ちしたのである。しかし上州勢は幕府軍に破れ、天狗党に協力した石岡地方の家が幕府軍により打ち壊された。この時の戦で府中の町では約160軒が焼失してしまった。最終的には幕府軍により多くの天狗狩りが行なわれ杉並・谷向などで処刑が行なわれたという。天狗党（筑波勢）は府中市内の寺などに宿泊していた。主な宿泊先は、国分寺、東耀寺、本浄寺、照光寺、華園寺、新地八軒などがある。

天狗党はここで祈った後、筑波山で62人の同志たちと共に挙兵した。そのとき藤田小四郎は23歳の若者であった。

筑波山神社の拝殿の階段を上る手前の左側の少し高くなっている広場に天に向かって右手を高くさし上げている小四郎の像が建っている。

天狗党の最後はあまりにも悲惨でありこの歴史

を見ていくとどうしても心が暗くなる。

挙兵した当時、彼らは理想を求めていたはずで、資金を強要して、反対された家に火をつけたなどという狼藉もあったとされ、石岡も2つに割れ争われた。

・鈴の宮に名前について

鈴の宮神社は江戸中期に建てられたものではないかと思われませんが、鈴の宮の名前の由来は、この神社の場所が、律令制時代に各国府を結んでいた官道の（府中）駅家（うまや）（16 km ごと）に置かれていた）があったところではないかとも言われている。旧律令制時代の古代官道は、ほとんど解明されておらず、最近発掘調査でこの道路の跡がいくつか見つかって少しずつわかっている。この駅家が古代律令制のころからそのまま江戸時代まで、この地で受け継がれてきたとも思われぬが、官人が往来する時に駅使が鈴をならす風習があり、この鈴が使われ無くなった時にこの神社に奉納されたものだと言われている。



我が労音史（7）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1970年の社会情勢と音楽状況

アメリカ大統領にジミー・カーター（民主党）就任、米国初の黒人国連米国大使ヤングが就任。カナリア諸島でアメリカとスペインのジャンボ機が空中衝突、25名が死亡。スペインで1970年に総選挙で「自由」「民主主義」の標語が溢れる。文部省が「君が代」国歌と規定（正式には1999年に制定）し問題になる。この年領海を12浬、漁業運営水域200浬を実施（主要各国が実施）した。夏には原水爆禁止世界大会が174年ぶりに統一大会に、中国は文化大革命の終結を宣言し華国鋒体制が確立。日本赤軍が日航機をハイジャック、拘留中の赤軍は9名の釈放と800万ドルを要求し、政府は超法規規で受諾。一方西ドイツではルフトハンザ機乗っ取り犯からの要求を拒否し、犯人全員の射殺事件がおきた。この年プロ野球の王貞治がホームラン世界記録を達成し第一号の国民栄誉賞を受けた。カネミ油症事件の被害者が全面勝訴、チエコスロバキヤの知識人が人権宣言、「宣言」に署名、ポルポト政権下のカンボジアがベトナムと国交断絶。

日本ファイルが市民オーケストラ運動をテーマにシンポジウムを開催、再建問題で声明を出す。「日本プロレタリア音楽同盟の足音」（秋山邦晴構成）

が西武劇場で開催。『君が代』国家の文字を削除しると国民文化会議など98団体が政府に申し入れを行う。全国音楽家労働組合協議会が結成、超党派国会議員による音楽家議員同盟が結成。「うかれひょうたん六機織歌」(林光のオペラ)がこんやく座で初演。

この年、諸井三郎、村山知義、武藤桃州、マリアカラス、ストコフスキー、チャプリン、エルビスプレスリーが逝去。

1977年の労音の動き

二ヶ年計画の最終月直前に「サークル活動交流集会」が200名の参加で開催。この集会では職種別分散会(金融、保育園等)を設け、共通の話題で交流し職場での労音サークルの果たす役割が話され、有意義な活動集会となった。第25回総会では、新たに三ヶ年計画の第1年度方針として「翌年の創立25周年を中心にした運動、全ての職場・地域・学園にサークルをつくり、3万名の会員・3千サークル・『月間音楽』1500部・1000名の委員を拡大目標とする」を決定。また創立25周年に向けて、記念例会の作品委嘱や海外演奏家(団)の招聘等と記念行事の促進を決議。そのうち作曲家の林光氏が既に構想を練っているカンタータの意見交流を計ることになった。

例会会場の問題として、文京公会堂が耐震面で構造上の欠陥が発見され廃館が決まり、更に厚生年金会館の改修で休館になるなど、他の多くの会場で防災上のスプリンクラー強制設置のために使用不能になる状況が発生した。そのため、各ブロック・各地域ごとの「地域例会」の方針と体制を確立することを決める。

例会では「2028年5月のベトナム民族歌舞団招聘運動の促進とベトナムへ音楽器材・楽器を贈るための200万円カンパ」のアップीलを採択する。総会記念音楽研究会には、谷山浩子・ピーカブー・及川恒平・はしだのりひこが出演し、地域例会の内容検討に参画。

拡大月間で、全てのブロックが地域例会に取り組み大きな成果を上げた。3月〜5月の拡大月間では、サークル・会員数(1万5千人の増加)ともに成果を上げ、9月〜12月では2万名を組織し、昨年比200名の増になった。この主な原因は、全てのブロックで地域例会が開催、中でも南部ブロックが取り組んだ地域例会(森田公一とトッピギヤラン)は大田体育館に2000名を組織し大成功だった。その要因は150名を超す実行委員と合唱団を各職場から参加し、出演者とともに例会内容を話し合い、それらの内容が例会に反映し感動的なコンサートになり、労音運動への自信を高めた。他に「高橋竹山・津軽三味線例会」は19回2000人を組織し、竹山の至芸によって、民謡・民俗芸能の生命力が遺憾なく発揮され、若者からお年寄りまで、幅広い層に労音を広められた。クラシック例会では、51種目67例会(半分以上が海外演奏家)が取り組まれた。音楽業界では長引く不況で、大手の総合文化社が倒産し、ロス・フイルの中止など深刻化が進んだ。労音では、外山雄三(指揮者)と成田絵智子(歌手)の企画発案で、山田洋次(映画監督)の演出・台詞オペラ「カメルメン」(ビゼー作曲)の原典版上演を25周年記念例会として労音の自主製作として取り組む。大阪をはじめ7団体11労音が共同企画例会を行い、各地域の合唱団が運動を広める役割を果たし話題を広げ、判り易い楽しい充実したオペラとして音

楽界でも注目を浴びる。大合唱例会は、年ごとに充実し、200人の合唱団で「第九交響曲」3例会2000名を組織した。海外演奏家では、キエフバレエ・モイセイエフバレエ・聖トーマス教会合唱団「マタイ受難曲」・ドレスデン国立歌劇場管弦楽団などの大型例会やベロフ・ランパル・レオンハルト・ゲルバー・アメリカなどのソリスト、ゲバントハウス・タナーエフ・プラハウイーン・バルトック等の弦楽四重奏団など其々の部門を代表する例会を取り上げたが、内容の充実比して、満足すべき組織成果が上がらなかったが、外来演奏家に押されがちな日本人演奏家が頑張っていた。

ポピュラー例会では26種目、複数回は因幡晃(5回)・布施明(5回)・森山良子(3回)・トッピギヤラン(3回)・チューリップ(2回)・NSP(2回)で歌唱力を生かした例会で、森山以外はすべて満席だった。猪俣猛・ダウンタウン・南こうせつ・高石とも也が好評でした。海外関係では、ライモン・ムスタキ・アンダリエゴス・メルセデスソーサ・ウニヤラモスが民俗性に溢れたコンサートだった。ポールモーリアは武道館2回行ったが予約期間が短く満席には至らず反省を要した。労音会館を利用した例会は、ナターシャ・ブン・中島みゆき・高木麻早・中当ユミ・谷山浩子・田口清が身近なステージで好評だった。

伝統芸能例会では、能・狂言・文楽・地唄舞で7回、津軽三味線(竹山)19回、落語の独演会が7回、他に「ふきの会」や前進座が行われた。労音の邦楽・伝統芸能は最高の演者の登場で定評があるが、能・狂言以外は、独立した演奏会としては満席が難しく、緻密な準備と計画が問われる。

親子・ファミリー例会として、八王子では日フ

イル、足立では新星日響「森は生きている」が大きな成功をおさめこの種の企画要求を知らしめられた。また一般商業劇場の一部買取方式で要求に応え、一般料金より安い会費で例会設定にした。(宝塚劇場・日劇・日生劇場・歌舞伎座等を取り上げる)

例会外の活動として冬には第14回スキー友好祭を北志賀竜王で千葉・相模原の労音と共同開催し1000名を、夏には第19回夏の友好祭を本栖湖に1000名を集め音楽祭(長谷川きよし/はしだのりひこ・中当ユミ・黒坂正文・川津恒一・森田公一&トップギヤラン)と交流を深める。

第23回全国労音会議は、労音会館で130団体340名の参加で、共同企画「オペラ「カルメン」・布施明・高橋竹山)や大合唱運動について討議を深めた。総会を前にした5月の幹事会議では、翌年5月以降に55名からなる歌舞団を招聘し、全国で35回の公演を行うことを決定した。そのため年末にベトナムから3名の文化代表を招き、全国の労音で交流を行うことを決めた。そして翌年一月に全国から100名以上の代表団をベトナムに派遣することと「ベトナムへ音楽器材と楽器を贈る200万円のカンパ運動」を決議。また、この年の一月には音楽業界の関係者と各地労音の幹部との顔合わせ・相互交換を目的に新春名刺交換会が労音会館で音楽マネージャー・プロモーターと労音代表者が100名集結し交流が行われる。また3月には、第3回全国交流集会在伊勢市で600名の参加で開催、例会企画・サークル活動・機関紙活動の分科会に分かれて経験交流を深めた。記念講演は民族音楽者の小島美子による「日本音楽を考える」でした。長浜労音が誕生し14万6000

人が会員数です。

1977年の私

蒲田に家を購入してから2年3年、それまでは(横須賀から大井町まで、2時間以上かけて通っていた)活動で遅くなると若い仲間に泊めて貰うなど、年間で家に帰れたのは約半分、嫁さんは夜勤(当直)などで年間30日くらい、互いに限界に近い状態だった。やむを得ずに活動に中心地に家を購入することになり、方々の伝手で何とかローンを組み購入し、そのお陰で益々活動に没入。34歳と一番脂が乗りきっている時でもあり、職場・地域・労音・・・七面法被の大活躍時代であった。従って暴飲暴食や夜中までの活動で、睡眠時間も少なく、遂に体を壊し入院したのも此の頃か？

職場では組合分裂が定着し、人間関係が崩壊し自由に物が言えない中、唯一労音のサークルが組合に関係なく、自由に信頼できる関係を築きつつあった。サイクリングや飲み会、ハイキングやスキーバスで年間数回の集いを計画。地域活動では若い人が多い職場で勉強会(ものの考え方生き方)若い人の中に、統一教会が忍び寄り、多くの若者を食い物にして、あちこちで職場放棄や家庭崩壊が頻繁に起きたのも此の頃でした。東京労音の活動も、サークル活動で明るい職場づくり等がテーマで、交流会があちこちで開催された。その延長として、若いカップルが多く家庭をつくる機会ができた。たくさんの仲人をしたのも此の頃でした。

つづく

石岡市指定文化財(十三)

兼平智恵子

それは今から十年前西暦二〇〇九年一月号当会報三十二号にて「柔らかいまるで幼子のような感のする阿弥陀さまに心が温まります」と紹介しました「風間阿弥陀」様を今回はご子孫の当風の会員、菅原さんより貴重な「風間阿弥陀の由来」寄稿して頂きました。

菅原さんの風間阿弥陀の由来をご紹介します。今一度文化財としての風間阿弥陀さまをお知らせしたいと思います。

風間阿弥陀 惣社二―二―一〇

(石岡市ふるさと歴史館)

有形(彫刻)

指定 昭和五五・六・二七

今でも変わりなく「まるで幼子のような」親しみのある姿で、石岡小学校の生徒さんを見守っているかのようです。

その場所は石岡市立石岡小学校敷地内の一角に、一三〇〇年代に築造されたという府中城の土塁を背景に、左側に万葉歌碑、『養老三(七一九)七月、常陸守兼按察使に任命された藤原宇合(藤原鎌足の孫)は無事に任期を全うし帰任の際、歓送の宴が催されたであろうその宴に侍った女性のひとり』が作者の常陸娘子(ひたちのおとめ)であった。是非、令和の時代にあわせ、常陸娘子の万葉歌、ふるさと歴史館にお訪ね下さい。

次に常陸国府跡の石碑、そして石岡市ふるさと歴史館(十年前は石岡市民俗資料館入館者は少なかった)、現在では特に石岡の皆さんの入館が多くなり阿弥陀さまを問う方も多くなりました。

ここで、菅原さんの寄稿をご紹介します。

風間阿弥陀の由来 菅原茂美

石岡市ふるさと歴史館前に現存する文化財。風間阿弥陀の由来を話すためには風間家の由来を話さなければ話がまとまらない。風間家の由来とは、今は風間家の後継ぎはなく、今は私の妻がその血を引く(十八代目)ので古文書から概略を話す。末孫は散り散りに分散。後を引き継ぐものなし。ほぼ絶えたが、チョンマゲ時代まで、府中城の家臣団の一系統である。位は侍大将二〇〇石どりと聞く。

阿弥陀像の所在地、旧住居地は石岡市府中二丁目六番地。最後の家主は風間秀元氏であった。秀元氏に至る歴史的経過は、府中城の分家で旧協和町にあった「小栗城」が、関東管領足利氏に応永三〇年(一四三三)滅ぼされ、殿と家臣団(小栗十勇士。その中に風間次郎正興三〇〇石どりの武将あり。市川猿之助一九九一年スーパー歌舞伎を新橋演舞場にて上演が関西の縁戚を頼り逃げる途中、幼子四代目「風間三郎正光」とともに府中城に対し幼子の養育と、府中城に小栗家守り本尊と思われる「阿弥陀様」の保護を依頼し、関西に落ち延びる途中、神奈川で酒を飲まされて全員討ち死に、その遺跡が現在藤沢市に存在する。さて阿弥陀様を抱えた風間家四代目は以後府中城の武將として勤務したが、時代が変わり後の者は、罰当たりのように碌な保護を施さなかった。一時盛んな頃は「できもの」が良くなるとして信心を集めたという。今は石岡市ふるさと歴史館の受付担当者、五人皆さんが交代で面倒を見てくださっているようですが、子孫の端くれとして心から御礼申し上げます。

菅原さん貴重な寄稿有難うございました。私達の間では不思議な阿弥陀様でとおっていました。本家に残された、幼子四代目風間三郎正光は立派

に成長なされ府中城で武將として尽力なされたこと、「できもの」が良くなるとして信心を集めた事、約六〇〇年の世を守ってきた阿弥陀様、次世代に大切に語り継ぎたいと思います。

尚『常陸総覧記』(註二)の中に「風間阿弥陀」について記載ありとの資料も提供頂いております。次回の折にご紹介したいと思います。

どうぞどうぞこちらにお入りなさい

大木桜木の言う

智恵子



豊漁と不漁の峡で

伊東弓子

どう取り組もうかと考えた、が思いが先走ってまとまりが悪かった。十回から十六回分(九回までは済んでいる)の文書を学習会でどう取りあげ、参加者に文書への興味を持ってもらう。御留川時代を知ってもらおう。その為にはどういう方法がいにか迷っていた。役員会もちかくなるにつれ、焦り出した中で一応案をまとめていった。

○ 四〇五人のグループ毎に、リーダーを一

人入れて勉強していく方法。

- ① リーダーに先ず文書を読んでもらう。
- ② 二〇三回はグループみんなまで読み合う。
- ③ 読んだ文書を原稿用紙に書いてみる。

④ 書いた文書の内容を自分なりに発表していく。

⑤ リーダーに内容をまとめてもらう。

⑥ みんなで読み合う。

歩いてきた土地にまつわる物、漁に関するもの、訴訟の物、内容はさまざま、時代の差はあって何ら変わらない現代人の姿を通して、二〇四百年前の人々の姿をみていこう。それが将来の人づくりに何か影響あるようにと願って考えてみたが、そんな時

役員、会員の中から“スパッ”と、私の迷いを解決してくれるような意見が出てきた。「古文書を勉強するような専門的なことは、そういうグループでやって貰った方がいい。それより、文書の中の出来事をより分かりやすく、現代の言葉で教えてもらう方がいい」又、Uさんからは、

「沢山やらずに、御留川漁場の中で豊漁の時、不漁の時、二〇三件ずつ取り出してみてはどうか」

これも又筋の通った案だった。もやもやしていたものや、理屈めいたものが吹き飛んでいった思いだった。さあ動き出すぞ、Uさんに豊漁の時、不漁の時の記録を出して貰って、学芸員に原文からの資料を依頼した。それにしてもリーダーになる人をお願いしなくては、と候補を立てあたってみた。

・Mさんは、勤め先の行事“ひなまつり”があるので脱けられない状態だった。

・Sさんは、リーダーになってやる程の力はないから無理だと、参加者になるとのこと。
・K先生は、当日他の地域での講師になっておいでとのこと。恐れ多いと思いつつも

・A先生の所を尋ねてみた。先生から長い時間お話しを頂いた。結論として「自分達の方でやってみては」ということで、励まされ、背を押して頂いた。

リーダーとしてIさんと私が受け持つことになり、印刷資料づくりの日に、勉強の機会をもつことになった。しかし原文依頼、印刷が少しずつ遅れていつて次々に後手にまわってしまった。これも私の大風呂敷を広げすぎる八方美人型の性格と優柔不断さからくるものと、反省しても今は前に進むのみ。さあ、乗り出そう。印刷が済んで、Iさんのリードで勉強会が始まる。「こういう形ならとてもいいよね」という声に気をよくし、私も自分の分野を話していった。そして当日をむかえることになった。

会場は前もって下調べをし、使用方法は考えてあった。備品も手続きしておいた。展示する場所がないのが残念だった。

当日の準備では力が必要だった。机・椅子共に古い物なので大分重く、気をつけての作業となった。広い会場の前の方が学習の場、入り口には受付・机・椅子を利用しての記録の展示、後方には、板戸を使つての展示が出来てその前に休憩場所を用意し、床に大きな展示を置いた。

参加者が二十六名ということで気をよくし開会した。こういう状況の中でも私の心の奥では、自分の受け持つ内容はともかく準備の不充分さに胸が締め付けられる思いであること誰も知らないだろうし、助けてもらえない辛さを抱えていた。

本田学芸員の話の後に報告があった。新

たな発見の喜びを聞かせてくれた。小川地区で江戸時代焼き物をした場所が見つかったという知らせだった。この会でも是非訪れてみたいと思う。

Iさんとの勉強は、まとまりよく実に明快だった。マイクを使うことに気が付かず、後になっての反省で残念。

いよいよ私の番になった。私が受け持った勉強の時間は、顔から火が出るような思いで押し通していった結果になった。一枚ずつ配り内容は兎も角、大きな声でまな板の上の鯉の心境を進めた。

「全く、これでも大人のやることか」と思われても仕方がないのに、愚痴る声も出さなかつた参加者の気持ちを思いやると、申しわけなさで早く終わらしたかった。

休憩時間が救われたひとときだった。今までになく(五回の学習会の中)参加者同士の交流・会話・展示物への関心があつて質問も活発で明るい会場であった。広い会場の一ヶ所という環境のよさだったろうか。それに二十六回続けてきた中で出来た人間のつながりからくるよさもあつたらう。私の欠点を許してくれたひとときだった。

何人かで昼食をとつたが、ご馳走を味わう気持でもなくなつた喉を通つて行つた。いつも意見してくれる友も何も言わずにいた。私の不始末を察してか。

気が済まないの、小さくまとめたものをお詫びの積りで届けて歩いたが、

「何とか、まとめてみました」

「逆に私の勉強になりました」

と参加して下さった方が、活用して下さ

っている姿勢に感謝するばかりだ。

不備な資料とひとりよがりの自分を反省して、当日の資料を開いている。参加者は随分混乱したことだろうと思つている。あらためて人をまとめていく力量、人柄が問われるものだろうと、役人しかり、川守しかり、請負人しかり、力量・人柄・姿勢によっては、漁民たちの苦労や生活は大変なものだったろうと、あらため思つた勉強会だった。



五所駒瀧神社

小林幸枝

数年前、石岡から真壁までに通つていたのに途中に五所駒瀧神社があると知らなかつた。

五年前、伝正寺温泉に寄つてみようと思つた時、五所駒瀧神社の事を知りました。

五所駒瀧神社は、平安時代の長和三年(一〇一四)の創建と伝えられています。承安年間(一一七一〜七四)には鹿島神宮の祭神武甕槌命の分霊を祀り、真壁氏の氏神ともなりました。

約四〇〇年の歴史を持つ真壁の祇園祭はこの神社の夏祭礼です。毎年七月二十三日から二十六日まで町内をあげて盛大に行われます。

また、八月三十一日には「かつたて祭り」が開催されます。五穀豊穡を祈願する祭りです。

紅葉も綺麗です。例年十一月中が見頃です。真壁の鎮守として街の住人から尊崇を集めており、

創建から一〇〇〇年を数える五所駒瀧神社であります。古い神社、春は桜が、夏は親緑が、秋は紅葉が、山懐に抱かれた谷あいには流れる川が生み出す風景はとても美しいです。

ここにしかない景色がみられる四季折々の季節に、訪ねるのも魅力です。

是非、行ってみたいかがでしょうか。

父(10)

菊地孝夫

菊地家の過去

菊地家は明治2年(1869年)、小石川の江戸藩邸から鹿の子に移住した。曾祖父「菊池慎七郎」は水戸の本藩よりほかの二人とともに支藩、府中(石岡)藩に出向した。

これは明治新政府に対して、新たに石岡縣となるにあたってその幕僚が水戸支藩の官吏では格が下すぎるので、一応御三家の重臣をこれに充てその旨を新政府に届け出ることにした。菊池慎七郎以下8人には正規の時に着用する紋服に三つ葉葵の紋をつけることが許されている。これをつけていれば江戸城への登城が許される。

小石川の屋敷は新政府に没収されたので、一四〇家余りの家臣団を引き連れて石岡へとやって来たのである。

「石岡縣権大参事」という御大層な職名は今ではいけば県の総務部長といったところだろうか。初代石岡知事(県知事)はほかの二人の幕僚とともにサッサと水戸へ帰って行ってしまった。

残された慎七郎は息子の多助(天保一〇年・1839年生まれ)の曾祖父)らとともに明治新政府

に対する厄介な事務手続き、石岡縣の運営にあたった。

石岡縣は明治四年新治縣に併合されて、足掛け4年で消滅し、県庁も土浦に移りそれに伴って失職した。このあたりの時代は混乱もしていたし、旧士族の明治新政府への反抗と相まって、対策に苦慮した明治新政府は水戸に中央から県知事を送り込み官僚も中央から派遣した。

食録を奪われた旧士族は、新政府の政策には陰に陽に抵抗した。彼らにしてみれば、薩摩・長州のきのうまでの下層武士・町民あがりがいきなり新政府の高官となり自分たちの上司となって威張り散らすのが我慢ならなかった。

明治維新のきっかけは水戸から始まったと言ってもよく、多くの犠牲者を出している。尊王攘夷の思想的バックボーンは水戸学から始まっている。ゆえに彼らにしてみれば面白いわけがない。藩主はともかく、彼らのほとんどは新政府に登用されない。これは茨城に限ったことではなくて各地で同様なことが起こっている。

明治一七年に起きた加波山事件も、栃木県に派遣された旧長州藩士、三浦何某が圧制を敷いたために起きた事件である。三浦を手製爆弾で爆殺しようとした。これに茨城からも多くの旧士族たちが参加し一大事件となった。板垣退助らを首謀とする、自由民権の運動が早い段階で両県でも広まっていた。三浦はこれに対し茨城、栃木の官憲を大量動員し徹底的に取り締まった。延2千人の検挙者が出た。その過程で警官に死亡者が出る。茨城県の首謀者は、数人が死刑となった。

明治六年には、石岡を茨城県の県庁所在地とする案も持ち上がったが背景にはこうした事情があったので立ち消えとなった。

三浦はそのうち中央に戻り、警視總監として全国警察官吏の頂点に立ち、自由民権の運動を弾圧、治安維持の策動を指揮した。この流れはその後の治安維持法や特高警・察憲兵隊の左翼、進歩的知識人に対する弾圧へとつながっていく。

鹿の子の士族たちはやがて「御陣屋」と言われていた元真地、土橋あたりに転居する。

角川の地名辞典には元真地の地名は載っていない。せいぜい百五十年ほどの新しい地名なので載せなかったのか。由来は判らないということだが「元陽真地」から録ったのではないかと推察される。元町、あるいは本町でもよかったのだろうか、へそ曲がりのこだわりがあったのだろうか。

明治初期のこうした一連の史実は、市の歴史やあるいは県の歴史からは意図的に抹殺されてしまっている。抹殺と言っておかしければ、この数年間の記録がすっぽり抜け落ちていのは合点がいかない。歴史は連続した時間の流れをなぞらなければならぬ。わずか百数十年前のことがあいまいでしょうがない。

歴史の町というからにはこうしたことも詳しく、正しく語られなければならない筈だ。

幕末に起きた天狗党騒動にしても、私が古老から聞いたこととは異なっているケースが多い。中央政府の都合のいい歴史観によって史実がゆがめられている一例だ。

このころ菊地家は「菊池」の名を「菊地」に改めている。家には古い「菊池」の印鑑が残っていた。

石岡に残った曾祖父、菊地多助は生計のため水運に携わった。恋瀬川から利根川を経て東京への船舶輸送の仕事である。しかしこれも中央から大

手の輸送会社（日通の前身）が進出することで職を失う。

祖父順造は埼玉電燈（東電の前身）に勤め浦和に居住する。ここで父敏夫が生まれた。

この石岡の地は江戸期には商人中心の町であり、したがって文化も商人、豪農がそれを担ったと言える。武家は二十軒ほどしかなかった。

同じ時期、母方の曾祖父は幕臣・旗本で偶然ではあるが同じく小石川に屋敷があった。

江戸に官軍が迫る中、家族はほかの旗本たちとともに蒸気船に乗って静岡県沼津に逃れる。

曾祖父は維新の混乱期、騙されて家屋敷財産を失ってしまう。大蔵省に出仕していたが、外聞が悪いので初代台湾総督「樺山資紀」に同行して台湾に渡る。

長男は宮島資夫のペンネームで作家となり、大杉栄・伊藤野枝・辻潤・神近市子等と交友する。

代表作は「坑夫」でこれは大子町の鉱山がモデルになっている。大正期の代表的なプロレタリアート・アナキズム作家たちの一人である。そのせいで宮嶋家から追われる。のちにペンを捨て、家族も捨てて禅寺でその生涯を終える。

跡を継いだのが、その弟の祖父・宮島龍夫である。阿佐ヶ谷にあった家には、作家として売れる前の林芙美子がしょっちゅう晩飯を食いに来たそう。

その妹は明治期の水彩画の草分け・大下藤次郎に嫁いでいる。大下はのちに「美術出版社」を興した。森鷗外と親交があり、その短編小説のモデルになっている。鷗外は年下の友人・藤次郎の死を悼み葬儀委員長として弔辞を読んでいる。

後年母の死に際し香典が送られてきた。お返しを送るとともに電話で二、三言話した。

私には、片や幕臣、方や御三家の重臣その二つの血が流れているので、薩摩・長州（鹿児島・山口）に対して反抗的な遺伝子があるのだろう。岸・佐藤・安倍などに対してはどうしても嫌悪感しか持てないのは遺伝子のなせる業だ。

祖父は過激思想に走る私を小学校の校庭に呼び出し、その兄のことを話して私の行動を思いとどまらせようとした。



【風の談話室】

《読者投稿》

やささと暮らし（28）

さと女

何でも使い続けると壊れることが分かった？ずつと使えるところがなくなると、突然に動かなくなってしまう・・・疲れた時、中々行く行かないとき、私を癒してくれるのは花、我が家にはたくさんのお花が咲いている・・・

四苦八苦・・・？

●令和になり3日目、突然にパソコンが作動しなくなりました。押したり引いたりあげくは叩いたり？とうとう新しいパソコンに買い替え、夫にセットアップしてもらったが、なかなか使えない。基本はそう変わっていないのだが・・・そのたびに質問「ちゃんと見ているよ」「ちゃんと聞いている！」暫くはこんな言葉が飛び交うのかな・・・

●パソコンの機種を変更して1週間経った、使い慣れたパソコンが懐かしい。昨日もスマホからの写真を入れるのに削除してしまった。何度も聞いて・・・メモするからと言うと、理屈で覚えなれない。いつまでたっても判らないよ・・・なんとも厳しいこと。

気分転換はやはり花、芍薬がやっと咲き始めた・・・

●いろいろな顔をした花たち、こぼれ種からあちこちに花を咲かせている。下を向いて咲く花、上向きに咲く花、名前はオダマキ、あいらしい花です。

●ジャーマンアイリスのエlegantな花、ブルー、黄色、オレンジ、白、次々と咲いています。華やかさはないが凛とした佇まいのアイヤメも咲き始めました。

●紫蘭は丈夫で育てやすい山野草。そして芍薬、あまりにも花がつき過ぎ、切り花にして玄関に飾りました・・・この花も可愛らしい、一か月ほど前から咲いている淡い紫色の可憐な花、都忘れ・・・2週間遅れで濃い紫色の花も咲き始めた。

名前の由来を調べたらこのように書いてあった。
【承久の乱（1221年）に敗れて佐渡に流された順徳天皇が、この花を見ると都への思いを忘れられるとの話によるとされ、この由来によって花言葉は「別れ」や「しばしの憩い」などといわれる】

イベント諸々・・・

●八郷ライオンズ50周年の記念式典と祝賀会。万葉の森に囲まれた、国民宿舎つくばねにて盛大に行われた。山つつじ、山藤なども満開で来賓の方たちを迎えてくれた。祝賀会のウェルカム演奏は

クラリネット、ギター、ベースのお茶目なジャズトリオ。市長さんは生バンドで3曲ほど歌ってくれ祝賀会を盛り上げてくれた。

●1日間に亘る陶炎祭、3日目の今日行ってきました。2時間ほどあちこちのテントを覗いたりしたがとても見きれません。飲食ブースも人気の所は混んでいて、結局カレーを知人のテントで食べました。お店をやっている息子へは小鉢を5個ほどお土産に。夫は自分でコーヒーカーップを買っていました。ここの所立で続けに知人から買ったお気に入りのカップを3個も割ってしまったので・・・？

●今日はエコクラフトの日、ランチはキムチ丼。全員完食、コーヒーを頂いた後は籠づくり、実用をかねてパン皿などを・・・。気が付くと4時、テラスに出て樹々や花々を鑑賞しホット一息、また来週・・・。

●歌の力でふるさとを応援している山本恵莉子さん。今日も素敵な歌声でファンを魅了させてくれました。コンサート終了後おじ様、おば様に囲まれて・・・。

●コロちゃん・・・

●すっかりおじいちゃんになってしまったコロ。

日中は表の小屋でまったりと過ごしているが、昼頃異常な泣き声で行ってみると、どうも右足を痛めたらしい。小屋の周りをぐるぐる回って、リードに絡めて痛めたのか、夫は脳梗塞か？なんていうものだから、獣医さんのところに、診察の時には痛みもなさそうだったが、痛み止めの注射を一本打った。日曜日は、記念のイベントに出席しなければならぬし、月曜日まで入院させることにした。そういうわけでコロのいない我が家は会話

もなく・・・？

●農家さんの田植え、2町歩以上を夕方までに終わらせたとのこと。用事があって訪ねて行くところようど炊き上がった所だからと赤飯とあんこをいただいた。親戚の方も動員しての一大イベントです・・・

●冷たい雨・・・今日も一日しとすと涙雨、雨には青がよく似合う・・・

●日がな一日・・・

●今日は少し汗ばむような天気。お天気に誘われ久しぶりにお掃除、布団干し、そして午後から竹ひごづくり。一緒の仲間にはずいぶん遅れをとってしまった。kさんは真竹1本分の竹ひごを作っている。私は2節がやつと、それでも使えるものはほとんどない。師匠はどんどんやってみな。と帰りには竹を持たせてくれる。今日は竹を磨きひたすら鉋を使い、何とか持ってきた分が終わった。が、何本使えるか？

●朝からしとしと雨が、なんと寒いこと・・・。今日は人生初体験、胃カメラを済ませてきた。何ともすごいものだ。あんな太い管をのむなんて。ドクターの異常な声に元気が出て、家に帰ってからタケノコの処理、この辺りはどこの家でも屋敷の中に竹藪を持っている。昔、竹は農家にとってなくてはならない物だったのでしよう。我が家も畑の隅に小さな竹藪がある。小さい竹藪だが結構働いてくれる。友人たちがこの季節心待ちにしてくれる。今日の雨で、またニョキニョキ顔を出すでしょう・・・。

●この時期の農業用水のため池は霞ヶ浦から引かれた水で満杯です。ここから田んぼに水が流れます。池には霞ヶ浦からの魚もたくさんやってきました。

す。釣り人も訪れ、今日は散歩の途中親子連れに会いました。釣り竿が、しなっとなかなか上がりません。3人がかりでやつと上げたらナマズでした。体長20cm以上の大物です。タナゴ釣りの釣り人も結構見かけます・・・



《風の呟き》

或る時代

打田昇三

私の母方祖父は、かつて土浦に在った拘留所の看守から、東京に置かれた警視庁の警察官となり夫婦共に官舎暮らしをしていたのだが、私の母親が生まれて間もなく伝染病に夫婦で感染し共に死亡した。乳幼児が五歳の姉と共に異郷で両親を失ったことになる。茨城に居た祖父の弟が高浜から船で上京し（鉄道は未だ無い）遺骨と幼児二人を引き取り育ててくれたのである。其の時に叔父夫婦には未だ子が無く、私の母親は叔父夫妻を実の父母としていた。

殉職扱いなので、警視庁から養育料が支給されていたが、警視庁も慈善事業では無いから私の母が二十歳になった時に出頭命令が来た。無学な田舎娘に対して厳重・厳格な身上調査や身体検査などが行われ、母親が配属？させられたのが、東京警視庁に新設された特別高等課長官舎である。つ

まり、近代歴史上で悪名高き「特高警察」の親分の官舎に住み込みで働かされたのである。

「特高警察」誕生の契機は、当時の摂政（後の昭和天皇）が国会へ向かう途中で狙撃され同乗の侍従長が顔に怪我をした事件である。逮捕された犯人の青年は、恩赦で死一等を減じられる筋書きだったが、裁判で「私の行為は正しい」と余計なことを口にしたので直ぐに処刑された。国会議員であった父親は遺体を引き取らず無縁仏にされたと言う。此の事件で内閣は総辞職し、警視総監と警務部長（後の読売新聞・正力松太郎）が懲戒免職、犯人の卒業した小学校長らが引責辞職などと言う不条理な波紋が広がった。

日本は明治維新で世の中を変える筈のところ実は支配者が幕府將軍から天皇を擁する軍部が変わっただけで「大正デモクラシー」も看板倒れに終わったのである。芥川龍之介は「或る旧友へ送る手紙」と言う遺書に「将来に対するぼんやりとした不安」と記したらしいが、やがて大日本帝国は第一次世界大戦に参戦しシベリア出兵などから他人の土地である中国大陸や南方諸島に踏み込んでしまい、大多数の国民が知らない間に、国力も考えず日米戦争まで引き起こした挙句に破滅することになる。

「おせっかい」も自分に余裕があるならば兎も角、当時の日本は政局が不安定で景気が落ち付かず米騒動などが起こり、貧富の差が拡大して農村は疲弊し、社会主義運動の過激化で政府は其の取締に追われ、弾圧強化などが右翼思想を台頭させて、国家が有らぬ方向に傾いていたらしい。

つまり天皇を頂く軍部だけが異常に肥大した結果、折角の大正デモクラシーがバランスを失って転倒したのである。

明治維新では、世の中を刷新する名目で徳川幕府を倒した筈なのだが、庶民にすれば支配者が幕府・將軍から天皇に替わっただけで何も良いことは無く、折角の「大正デモクラシー」も看板倒れに終わった。

大正文壇の寵児とも言わべき芥川龍之介は、昭和二年に「或る旧友へ送る手紙」という遺書を残して自殺したが、其の中で「将来に対するぼんやりとした不安」と書いていたらしい。その不安とは何であつたのか：

大正時代は、関東大震災による首都壊滅も暗い影を落としてはいるが、第一次世界大戦への参戦、日露戦争の尾を引くシベリア出兵と其れに起因する尼港惨劇、中国の第二革命など、大多数の国民が知らない間に日本が国際紛争に巻き込まれて行く不安。国内では政局の不安定と景気不景気の波による米騒動、農村の疲弊と貧富の差に起因する社会主義運動の激化、其れを取り締まる弾圧の強化、特に内務省が企図した治安維持法の成立によるデモクラシーの後退と、其の反動による右翼思想の台頭などが、後の軍国主義国家への道を辿らせることになったように思う。

折角の民主主義と、其の弾圧と、其れに反発するテロと相容れない三つの要素の上に絶対権力が君臨する嫌な国家体質が出来たのが大正から昭和にかけてらしい。間もなく平成から令和に変わる。「令」が号令優先にならないように、民主主義が守られる様に「和」の優先でお願いしたい。

日本人を尋ねる

打田昇三

天皇の譲位で元号も中途半端な「令和」に変わり国民の忠誠心が盛り上がったのに不遜な話題で水

を差すのは申し訳ないのだが、今般、前天皇が退位されるに当り伊勢神宮に参拝報告をされたのはかつて九州方面から近畿地方に進出してきた天皇家が地元の有力部族であつた「伊勢氏」の協力を得て西暦六百年代頃から、ようやく関西証券市場の片隅に上場できる様になった歴史が在るからであるうと勝手に推測している。

従来の神話は人間社会に適用出来ないから天皇家の成り立ちや伊勢氏との関わりは不肖にして知らないが、其れよりも早くから九州には古代王朝が存在していたようで、其の勢力が徐々に東進して来たことは「古事記」などからも推測できる。然し近畿地方にも在来豪族や名門？の盗賊などが居たで有ろうから、地域のボスたちの協力無くしては新興勢力が土着出来ない。

明治維新から大正・昭和の軍国主義時代に大日本帝国は「さわらぬ神に祟り無し」の諺を利用して国民を呪縛し、天皇の地位を高めて統率し易くした。素直な国民は作り上げられた神話を鵜呑みにするように教育されたが、其の後遺症が政府を始めとして未だに多くの国民に尾を曳いている。精神的なものとして神話を受け入れるのは良いが、人間は、どの様な高貴な存在でも神になる事は出来ないであろうから、歴史と神話とは明確に区分されなければならぬと思う。

そもそも日本列島に人類（日本人とは限らない）が棲息する様になったのは、学者の推測で約二万年前の氷河期とされている。人類そのものは約二十万年前にアフリカ大陸で発生したらしいが其の方々は十万年ほど経ってからヨーロッパ大陸、オリエント、シベリアなどへ餌の動物を求めて出稼ぎに行き、それぞれ現地に土着したのであろう。

かつてNHKが「日本人は何処から来たのか」

という、呆け老人を探すような番組を放映したことがある。其れに依れば、或る大学で日本列島に住み始めたと思われる古代人種の歯からDNAを採取して調べたところ大部分がシベリアのバイカル湖東部に住む人種のDNAに近くて、ごく一部が南方系、中国系、朝鮮系であつたらしい。残念ながら日本系は無かつた。此のデータは「新石器時代（BC九〇〇〇年頃）」のものと推測されているのだが、一方で、東シベリアの或る遺跡から出土した凡そ二万三千年前の人骨（主に「歯」）を調べた結果、何と是が日本の縄文人遺骨から採取したDNAに近かつた：と言われる。

既に其の頃に人類は羊を飼い、日干し土器を造り小集落を形成していた。狩猟生活での獲物はトナカイやマンモスであり、トナカイの皮は居住地の防寒資材に使用され、マンモスは骨の髓まで人間にしゃぶられた。大きな動物は捕獲が難しいが、彼ら（古代人）は大勢で獲物を泥沼に追い込み、溺れさせてから収穫したらしい。無駄な事をして、いる現代人よりは余ほど、頭が良かった？

ところが今から二万年ほど前に何かが起こる。何が起きたか詳しくは未だ解明されていないようだが、人類生息の痕跡が突如として消えたと言ふ。最終氷河期らしいから殆どが凍結したのかも？

そして：沖積世が終わる約一万年前に「現世人類」とされる古代人が現れる。それから考えれば千年や二千年の歴史を神様にしたたり高貴扱いするのは早すぎるのでは無いか：余計なことだが。

1勝1敗1分け

菅原茂美

現在4度目の「がん」との激闘中である。

戦績は1勝1敗1分けで、現在戦っている第4戦は延長戦。これがどこまで続き、どんな結末となる事やら：。

戦績を振り返ってみると、第一戦は2000年4月。19年前64歳である。病名は「前立腺がん」。県職を終え4年目。退職後、これから残り人生を楽しもうという時、超悪性の癌にやられた。当時前立腺がんは、現在の様に、対策が容易で、命を落とすことはまずない：という状態ではなかった。しかも非常に「顔つきの良くない」5段階評価の一番上、超悪性の癌であつた。宣告されたときは、死を覚悟するほどの悪性度であつた。それがPSAという前立腺がん特有のがんマーカーが、やつと表舞台に出てきた時代である。なんの自覚症状もない。念のため人間ドックで、7800円出してオプシヨンの時代。良かった。選択が正しかった。もう少し遅かつたら骨に転移などで、命をなくすところだつた。熱帯で仕事をして帰ってきてまもなくだつたので、マラリア感染の否定など予備検査に長時間かかり、3か月入院（筑波大）して①前立腺の全摘②放射線照射の両用で、無事乗り切つた。と思いきや、私の場合、いまだ前立せんがん細胞が生き残っているらしい。半年に一度検査をすると、PSAが時々動く。現在では対策は非常に進化し、完璧とはいかないが、再発という事はまずない：という段階である。完全克服ではないので、この戦いは、引き分けである。

第二戦は「膵臓癌」。2014年7月。79歳。これも人間ドックでがん発生の7年前、200

7年エコー検査で、異常を感知。30歳代ぐらいの女性臨床検査技師。よくぞ背中側から私の膵臓の水泡が、正常値よりやや大きいことを見抜き、精密検査の必要性を医師に申告して下さつた。勿論私には何の臨床所見もない。しかし筑波大の消化器内科の教授は、今の所、異常はないが、後々どう変化するかしれないので、半年に一回CT検査など続けましょうという事になり、これが何と7年間14回目で本物の膵臓がんへと発展したのである。人間ドックで要精密検査を宣告され、町医者で1〜2回CT検査を受け異常なしと言われると、ドックへクレームをつける人が多数いるらしいが、私の場合14回も精密検査でやつと陽性と判定された。長く様子を見るとはこういう事なのかとほとほと感心した次第である。治療は膵臓の一部摘出。胆嚢摘出。12指腸全摘、胃の幽門部摘出。回腸を胃底に接続。胆管・膵管を回腸に接続という施術を受け、1週間で退院。以後全く異常なく元氣澁刺。私の過程を振り返ると、どの担当者が甘い判断をしても、私の命は終わりであつたと思うと、しみじみ関係者の慎重さに感謝あるのみである。お陰様で、膵臓がんは私の勝ち。やつと1勝。

第三戦は「悪性リンパ腫」との闘い。血液の癌である。免疫細胞を造る骨髄をこのがん細胞が襲う。生き物が生きる基本は、この免疫細胞が襲い来る外敵と闘い、勝利することである。それがうまく行ければ健康という事。私の場合、免疫を司る白血球が、正常ならば5000〜7000であるが、最悪の時はわずか100まで下がつた。医師は敗血症で、死を覚悟したという。隔離病棟に即入院。それが何と私は99死に1生と云うか、生き返つたのである。三叉神経痛など激痛に襲われたが、

克服できたのである。但しまことに残念ながら右目が失われた。見た目には眼球は正常であるが、大脳に映像を送る視神経の束ががんじやられたのである。失明という最悪の結果を招いたのだから第3戦は私の負け。都合1勝1敗1引き分け。

第4戦は第3戦が姿を変えて現れた延長戦。現在激戦中。やっぱり白血球が激減。扁桃腺の激痛。新薬の抗がん剤により、どうやら勝利が見えつつある状況にある。勝てば2勝1敗1引き分けとなる所である。何しろ免疫細胞がやられているので、私の大好きな家庭菜園が、土壌には黴菌が多いからという事でドクターストップ。大好きな事が停止と来ては生きる希望が失われるが、寝室兼書斎という隔離病棟で、パソコンという近代兵器で物書きというのが現在の私の生存スタイル。畑に戻る日を夢見ながら療養一筋。83歳ながら、これが現在の私のすべて。大好きな囲碁は、AI搭載の新ソフト。5段設定で、全く勝てなくなった。前のソフトは5段に2く3割は勝てたのに、新しい機械に全く歯が立たず。これからの世の中、機械文明とどう取り組むか？ 長々と近況報告、失礼いたしました。

スピード狂時代

菅原茂美

近年、若者にとって車の人気が下向きとか。昔は、とにかくスピードを求めて、競い合ったものだ。今ではスマホいじりながらでは、スピードも出せないだろう。時代が変われば世相も変わる。昔から見れば今の若者は大きな変革だ。社会に迷惑をかける事の不合理を、悟ったというか、大人になったと云うのであろうか。

経済の発展や学会の生存競争などは、先発こそ

第一で、後発で人後に落ちては、世知辛い世相を生き抜いてゆけない。特に医学関係のニュースでは、如何にも近々に新技術が実用化される明るい希望が、身近かみみたいな錯覚を与えるニュースが、大々的に報道される。マスクもネタ探しに熱心で、ただ競争有るのみ。実際は試験の繰り返しや、安全性の追求で手間取り、許可が下りず10年近くかかる例が多い。ノーベル賞のES細胞は、失われた幹細胞の復活で、パーキンソン病など直ぐ回復みたいな報道であったが、どうしてどうして実用化はまだまだ日数がかかる。それだけ社会の期待も大きく、一刻の猶予も許されないのが現実である。

特にスピードを身に染みて感じるのは、交通関係で、なかんずく、リニアシステム。あれは何だというのであろうか？ 東京↓名古屋間を50分短縮が目標のようであるが、それが何だというのか。いずれ我々の期待がどうであれ、乗り出した船は止まらない。一部の人々にとって、短縮した50分は、誠に貴重な時間なのであろうが、一般庶民にとって浮いた50分は何ほどの価値があるのであろうか。むしろ、休養や周りを見渡す安全のためにこそなれ、直ちにビジネスに活用とはいくまいと思う。インフラや環境汚染防止のために、短縮した時間が有効活用されれば御の字かと思う。新幹線が中国で開発したみたいな宣伝で、中国は途上国に新幹線を輸出しようとしており、事実国際入札で日本は中国に負けたりしている。知的財産権の保護は嚴重であるべきで、すぐ真似をして特許権を侵害されたのでは、溜まったもんじやない。孔子・孟子等先賢の道德重要視の思想は、今はどうでも良いのであろうか。道德の重要性は、時代に関係ないと思うが、中国では世も廢れたと

思うほかない。

その他、政治・経済・人工頭脳・芸術など文明の進化も、猛烈なスピードで進化している。大方の人はついてゆけない。就職は機械にはじきとばされそうだ。世の中どうなつてゆくのか？

ブドウのシャイン・マスカットは、日本の果樹研究所が18年もかけて開発した2倍体無核で、糖度20%。皮まで食べられる超優れものであるが、日本が世に発表した途端、中国でも自国が開発したものとして世に出した。和牛の精液や受精卵の密輸など、日本のガードが甘いと言えはそれまでだけれど、知的財産権の保護は、国連がもつと嚴重であるべきである。中国の俺さえ良ければそれでよいとする世相・盗めるものは何でも盗め、盗まれる方が愚かという態度には我慢できない。そんな中国に日本人が巻き込まれ、はしたない現象が至る所に見受けられる。米国が中国に盗まれた知的財産は50兆円を超すともいわれるそうだが、国際秩序を簡単に破る国は絶対に許してはいけない。そういう意味で、中国が簡単に真似できない「リニア」は嚴重に秘密を守るべきなのであろう。中国をめぐる貿易摩擦は陰に陽に重大な社会問題である。

マツハ2で飛んだ英仏共同開発のコンコルド旅客機は、あまりにも燃料効率が悪く、長距離飛行できず、太平洋を横断できなかった。売りのマツハ2も、事故などもあり、発注は次々キャンセルで、2003年で営業飛行は中止された。時間短縮できれば、空気が汚れようが騒音が酷かろうが関係ないとする時代は、遠に行き過ぎたとみるべきである。物事は常にトータルで見ると見るべきものである。

時間短縮で余った時間は、趣味とか休養に使わ

れば正に理想。余分の時間で次のスピードを確保するために時間を割くのでは、命を短縮するよ
うなもの。おしんもよいが、命の洗濯・休養も、
偶には絶対必要と考える。そういう余裕のある考
えで、余生を送りたいと強く思う。



【特別企画】

打田升三の平家物語

巻第十一 (二・一)

- ・千手前のこと
- ・横笛のこと
- ・高野巻のこと
- ・維盛出家のこと
- ・熊野参詣のこと
- ・維盛入水のこと

大日本帝国時代の日本軍は何事も神頼みと大和
魂で克服するように強制されて「腹が減っては軍(い
くさ)が出来ぬ！」と言う諺は無視されていたらし
い。アメリカ軍の基地には必ず教会が置かれていて
日本よりも神様に頼る気持ちは強いと思われるが、
陸軍では戦闘員一名に十数名の支援要員を付ける編
成であったらしい。毒蛇が潜む荒野の訓練施設でさ

えも食堂など床暖房が完備しており一般兵士用の食
器類でも常に暖められた状態になっている。是は贅
沢では無く人間扱いである。

何処までも続く真つ直ぐな道路で猿に車を操縦さ
せ、ドライバーは寝ていた：そう言う怪しい話が伝
わる国土を持ち、埋蔵資源も計り知れない大国と、
碌な資源も無い小さな島国とが戦争をして勝てる訳
が無いのだが、鎌倉時代に台風シーズン知らない
モンゴル軍が攻めて来て自然災害で敵の船団を壊滅
出来た為に其れを「神風」と称し、強敵は天皇の祖
先とする神様が何とかしてくれるものと錯覚した当
事の指導者が無謀な戦争を引き起こして多くの国民
を犠牲にした。猿から進化した人類の祖先は誰であ
ろうと神様の筈が無い。

戦争の当事者は先ず「自分が勝つ！」と言う思い
込みに囚われてしまおうらしいが、相手も其のつもり
であるから余程のことが無いと勝ち続けるのは難し
い。その為に最初に負けた場合のショックが大きく
て連鎖反応で負け続ける。寿永二年(一一八三)五
月に北陸地方で木曾義仲に敗れた平家軍が、以後の
合戦で雪崩のように負け続けたのも其の所為である
と言えないことも無いのである。

平家が壇ノ浦で滅びる前年の寿永三年(元暦元
年・一一八四)源頼朝の要請で遠路はるばると鎌倉
に連行された平重衡は、勝者として優位にある頼朝
に面会をさせられる。重衡は巻第十一「戒文」で黒谷
の法念房から一夜漬けながらも仏の道について教え
を受けているから覚悟は出来ている。

平重衡の守役を命じられたのは伊豆の豪族・狩野
介宗茂である。此の武士は平家時代に平重盛に仕え
ていた工藤祐経(頼朝の義兄弟・側近)の一族であ
り、常陸平氏大掾氏とも近い縁者になる人物である
から重衡は大切に扱われた。

千手前(せんじゅのまえ)のこと

地方都市にあるバス停のようなタイトルである
が是は人名である。呼び寄せた平重衡が鎌倉に到着
した、というので源頼朝は直ぐに会うと言って手配
をさせた。鎌倉幕府の公的な記録である「吾妻鏡」
には「四月八日、本三位中将、伊豆国より鎌倉に
来着、よって武衛(頼朝)は郭内に屋一字を点じ、
之に招き入れらる」と書かれているから牢屋にブ
チ込んだ、とか、監禁したのでは無く丁寧に迎えら
れたのであろう。

重衡に会った頼朝は先ず「後白河法皇のお怒りを
宥め、併せて(自分の)父親の恥を雪ぐ(平治の乱
の恨みを晴らす)為に軍勢を派遣し平家追討をする
ことは容易(たやす)いと思つてはいましたが、こ
の様に早く、こうして重衡殿にお目に掛かれるのは
意外です。此の分では、屋島の大い殿(宗盛)にも
会うことが出来るように思えてきました」とと図々
しいことを言つてから「…そもそも奈良を焼き滅ぼ
されたのは亡き清盛殿の御命令でしたか、それとも
貴方の命令でしたか?あれはもつてのほかの罪で
す!」と厳しく責めてきた。

重衡は「またか!」と思いつながら面倒でも改めて
釈明をするしかない。「…先ず、南都炎上(奈良焼失)
の事は亡き入道(清盛)の指示でも私(重衡)の愚
かな考えでも有りません。僧兵たちの乱暴・騒動を
鎮めるために奈良へ軍勢を向けたところ合戦の成り
行きから、図らずも火が出て諸寺院が焼失してしま
ったので、力の及ばなかったことを悔いるばかりで
す」

昔は源平両家が左右に競い合つて朝廷を守護して
いたところ、近年は源氏の運が傾いてしまったこと

は改めて申し上げるまでも有りません。当平家は保元・平治の乱以来、度々の合戦に朝敵を平げて其の勲賞は身に余り、忝く(かたじけなく)も一天の君(天皇)の外戚として一族の昇進六十余人、此処二十余年は繁栄を続けて参りました。その平家も、今や運が尽きて、此の重衡も捕らわれの身となり此の地まで下って参りました。其れについて(巻第二、教訓状にあるように)帝王の敵を討つた者は七代に亘って朝恩が失せないというのは全くの嘘であると知りました。その例として、実際に故入道(清盛)は天皇の為に生命の危機にさらされながら何度も合戦に向いておりますのに、平家は清盛一代の繁栄で終り、子孫はこの様に没落をしまいました。功績による朝恩が失せないならば子孫が此の様に

なることは無い筈です。運が尽きた平家は都を出てから屍(かばね)を山野に晒し名を西海の波に委ねる覚悟でしたが因らずも私が捕らわれの身となり、更に此の関東に下るとは思っても居ませんでした。此の事は只々、先祖の宿業と悔しく思うばかりです。

然しながら古代中国でも殷の湯王(いんのとうおう)は夏(か)国の牢に捕らわれ、周の文王も同じ様な目に遭ったと言われております。末代の現世で弓矢取る身の習いとして敵の手にかかり、命を落とすことは全く恥辱ではありません。願わくば速やかに此の首を刎(は)ねて頂きたい!

そう言い終わると後は何も言わなかった。是を見た梶原景時は(自分が京都から連行してきたので)特に感激して「あっぱれな大將軍!」と涙を流した。その座に居た武士たちも同じである。

源頼朝も「決して平家を個人的に敵と思つては居ないが、何事も後白河法皇の御意思があるので其れに従う他は無いのです。」と上手く逃げた。

そう言いながらも頼朝は「多くの寺院を焼き滅ぼ

された奈良の敵なので大衆(僧兵たち)の言い分も有ろう。」と最初に述べた伊豆の武士・狩野介宗茂に重衡の身柄を預けた。狩野氏は南家藤原系で赴任先の伊豆に定着した工藤氏の一族である。それでも平重衡にしてみれば鎌倉や伊豆へ観光旅行に来た訳では無いから、冥土で罪人が閻魔大王に裁かれる心境であり、誠に哀れであった。

幸いなことに宗茂は情けある武士なので囚人の重衡に対しても厳しくせず、細部に気を使ってくれた。吾妻鏡の記録には一族郎党が毎夜十人ずつ付けて守護したとある。伊豆は温泉地であるから宗茂は先ず湯殿を設置してくれたので重衡は道中の汗や汚れを綺麗に洗ひ流すことが出来て、斬られる前に身を清めたいという願いが叶った。

其の浴室に年齢が二十歳ほどの色白で優雅な美人が鹿の子絞りの単衣の衣装に湯浴び用の格好で入って来た。浴室で奉仕するように命じられたらしい。それから少し経つて今度は淡い紺色の着衣で長めの髪をした十四、五歳の童女が小さなタライに櫛を入れて(髪を洗うために)入って来た。此の女性も浴室で重衡の世話をしてから、丁寧に挨拶をして出て行った。宗茂は、頼朝から「何事も御希望に添うようにせよ。」と命じられており「お世話をする者は、女性の方が良いでしょう。」と考えて其の様にしたのである。

他にも「どうか、ご希望があれば何事でもお申し出ください」と言ったのだが、重衡は「この様な(捕らわれの)身になった今は、髪を剃って出家するのが望み。」と言うだけであった。宗茂が其の事を頼朝に伝えると、頼朝は「それは思いも寄らぬことである。此の頼朝が個人的な敵として預かった身ならば許しても良いが、今は朝敵として(法皇から)預かって居るお方であるから出家など有ろう筈もな

い!」と厳しく言った。

その返事に失望したのか或いは希望を抱いたのか、重衡は警護の武士に「入浴した時に仕えてくれた女房は実に優雅な女性であったが、あれは何と言う名前であろうか?」と訊ねた。聞かれた武士が「あれは手越の長者の娘で容姿、氣立てに申し分が無いので数年前から鎌倉に召し使われている千手の前と言う者です。」と答えた。

其の夜、少し春雨が降って何と無く気分が鬱陶しかったが、誰言うとも無く女房たちが琵琶や琴を持って狩野介宗茂の屋形に集まった。宗茂は重衡の許に女性たちを向かわせ、自分も酒肴を持たせた十数人の家臣たちを引き連れて重衡の許に向かった。千手の前は重衡に酒を勧めたが重衡は少し受けただけで浮かない顔をしていた。是を見た宗茂は、次のように申し出た。

「すでに聞かれていますとは思いますが、鎌倉殿(頼朝)は重衡殿のことを気に掛けて居られて、充分にお慰めせよ!」と私も命じられております。任務を果たせず叱責されても私を恨むな!とも言われておりますので(重衡殿も)どうか御心を解かれてお寛(くつろ)ぎ下さい。此の宗茂は伊豆の国の者ですから、鎌倉の事は良く知らないのですが(主君の頼朝から)真心を持って(重衡殿に)お仕えるように言われております。一生懸命に勤めますので、何でもご希望があればどうかお申し出ください。」

宗茂の言葉に合わせるように、千手の前が酌をする手を止めて「…羅綺の重衣たる、情無いことを奇婦に妬む(らきのちよいいたる、なさけないことをきふにねたむ)力(ちから)の無い舞姫には、身に纏う薄い着物さえ重く感じる。なせ重く織つたのかと機織女を無情だと恨みたい!」と菅原道真が詠んだとされる

漢詩の一節を繰り返して口にした。

是を聞いた重衡は思わず「此の朗詠をする者を北野の天神は一日に三度飛来して守ろう」と誓われたと言う。然し此の重衡は罪により既に神に捨てられた身である。助音（じょいん）後に続いて朗詠すること）をしても罪が軽くなるならぬであろう。軽減されるならば謡うけれども」と悲しそうに言った。

千手の前は「十悪と言えども引撰す（じゅうあくといえどもいんじょうす）例え大罪人であつても阿弥陀仏は極楽浄土に導いてくださる」と詠じてから「極楽を願う人は弥陀の名号（南無阿弥陀仏）を唱えるべし」と言う言葉の入った今様（流行歌）を数回歌った。重衡はそれを聞きながら盃を傾けていた。その盃を千手の前が受けて狩野介に回した。千手の前は琴を取り出して狩野介が重衡の酒の相手をする間中、琴を演奏していた。

琴の音を聞いた重衡は「此の楽（曲）は五常楽と言うけれども今の私には後生楽と言える。続けて往生の急（極楽往生を急ぐ曲）を弾こう」と冗談を言い、琵琶の頭部を調節して唐の国から伝わった悲しい曲を演奏した。こうして、罪人である平重衡も自分の立場を忘れる程の時間を過ごしていたが夜も次第に更けてゆき、重衡は「ああ！（文化的に遅れていると思っていた）東国にも是ほどの優雅な女性が居るので驚いた。思い出に、どの様な曲でも良いから、もう一声、聞かせては貰えないであろうか」と希望をした。

重衡の頼みに千手の前は「♪一樹の陰に宿り合ひ、同じ流れを結ぶも、皆これ先世のちぎり」と言う、当時、流行した俗謡を面白く見事に歌いあげたので、是に合わせて重衡も「灯闇しては数行虞氏之涙（ともしびくろうしてはすうこうぐしがなみ

だ）是に、夜深、四面楚歌声」と続く中国の史書・史記にある話で和漢朗詠集に収録」を声に出されたのである。

どうでも良いことだが説明をしておく、その昔、中国で漢の高祖と楚（そ）の項羽とが帝位を争って合戦すること七十二度、項羽が勝ち続けていたが遂に負ける時がきて、一日に千里を飛ぶという飛行機の様な馬で皇后の虞氏（ぐし）と一緒に逃げることにしたのだが重量制限にこだわった馬がどうしても動こうとしない。項羽は涙を流して「我が威勢は既に廃れた。今は逃げる術も無い。大勢の敵が目前に迫っていることよりも、此の妃（きさき）と別れることが悲しい」と夜通しで嘆き悲しむばかりであった。その中に灯火の油も絶え闇夜となり心細さに虞氏も涙を流していた。次第に夜も更けて何処からか兵士の歓声が聞こえて来た。しかし其れは城の周りを囲んだ敵兵の叫びであった―其の内容を参議で文人の橘広相が漢詩にしていたものを重衡が歌ったのである。

死刑囚であることを忘れて平重衡は接待されていたが、夜明けが近くなったので武士たちが退出し、千手の前も戻った。その翌日、源頼朝が持仏堂（佛像や祖先の位牌が安置された部屋）で法華経を朗読しているところへ千手前が顔を出すと頼朝は笑いながら「昨夜は粋な計らいで座が賑わって良かった」と言った。それを聞いて頼朝の傍で事務を執っていた齋院の次官（齋院は神社に奉仕する皇女、それを管轄する役所の次官）藤原親能が「どういう事ですか？」と聞いた。頼朝が「あの平家の人々は、合戦のこと以外に興味が無いと思っていたのだが、重衡殿の琵琶の演奏、詩歌の朗詠などを立ち聞きして実に優雅な御人であると知った」と感心したように言ったので親能も「私もお伺いする予定でした

が、急に具合が悪くなり欠席してしまい残念でした。次の機会には必ず行くようにします」と言えは平家には代々の歌人、才人が多く、それらの人々を花に例えて三位中将（重衡卿）は牡丹と言われていました」と申し述べた。頼朝も改めて「重衡は）誠に優雅なお方である」と琵琶の演奏から朗詠まで巧みなことを褒め称えた。

重衡と文化的交流？をした千手の前は、その人柄や芸能の巧みさに感服して、後に重衡が奈良へ送られ僧たちの要求で斬られた！と聞いてからは髪を下ろし法衣に様を変えて信濃の善光寺に行き平重衡の菩提を弔いながら、自らも仏に仕える日を送り遂に大往生を遂げたと伝えられる。

横笛（よこぶえ）のこと

一方、重衡の甥に当たる（位階は同じ）維盛は屋島に居ながら心は都に馳せていた。残して来た北の方や幼い子たちの面影を偲んでばかりいて忘れることが無かったから「離れた場所で）生きていても甲斐が無い身である」と思い詰め、元暦元年（寿永三年・一一八四）三月十五日の明け方に屋島の基地を抜け出した。収容所では無いから脱走・脱獄では無いのだが、許可は出ていない。

身近に仕える与三兵衛重景（よそうびようえしげかね）と石童丸（少年）、それに船を漕げる武里と言う下役の者を連れて小船で紀伊国へ渡ろうとした。原本には阿波の国結城の浦から」と書いてあるが、其のコースだと不自然らしい。何処かの濱から出て鳴門海峡を越え、和歌山市近辺の衣通姫（そとおりひめ・そとおしのいらつめ）第十九代・允恭天皇妃、美女として知られた）を祀る玉津島明神、さらに日前宮、国懸宮を過ぎて、紀の川河口にある紀伊の港

に着いたのである。

其処から山伝いに都に行き、恋しい妻子に会おうと思つたのだが、既に本三位中将重衡が捕らわれて都大路を渡された上に鎌倉へ連行されたと聞いたので、此の身が捕らわれて父親（重盛）の名を辱めてはならない、と、都へ行きたい気持ちを抑えに抑えて、遂に高野山へ登った。

高野山には知り合いの僧が居たのである。元は藤原系・三条の斎藤左衛門大夫茂頼の子で齋藤瀧口時頼と言ひ維盛の父・重盛に仕えていた。十三歳から「瀧口（宮中の清涼殿北東、溝水が落ちる場所に詰める武士）」に任命されていたが、建礼門院徳子（平清盛の娘）に仕える下級女官の横笛という者に恋をした。父親が知って「世に時めく家の娘なら良いが自分の低い女性を妻としては出世に響く」と諫めた（反対をした）のである。

時頼は「中国古代の仙女とされた西王母も現代まで生きている訳では無い。不老長寿とされた東方朔と言う仙人も名前だけしか残らず、老少不定の世の中は火花のように短い。長命と言われる者でも七十、八十に過ぎず、そのうち輝いている期間は僅かに数十年である。夢・幻（まぼろし）の世の中に気に入らない者を妻として何の生甲斐があるか！気に入った女性を娶ろうとすれば父の命令に背くことになる……この様な悩みを持った今こそ仏道発心の良い機会である。面倒な浮世を捨てて誠の道に入ろう！」と決心して十九歳の年に鬘（まげ）髪を切り瀧口入道と名を変え仏門に入つて嵯峨に在る浄土宗の寺に住んだ。

是を知つた横笛は「私を見捨てるのは兎も角として何も僧にならなくても良いのに……そう言う事情ならば、どうして知らせてくれなかったのか！薄情な男ではあるが、訪ねて恨み言を言おう！」と、

或る日の夕方に供を連れ嵯峨を訪ねた。季節は旧暦二月の十日頃で梅津の里と呼ばれた地域の春風に何処からともなく梅の香りが漂ってくる。

桂川支流の大堰川（おおいがわ）を照らす月も春霞が籠つて臃（おぼろ）である。時頼への思慕の情が募つて誰の所為で此の様な思いをするのかと腹を立てながらも目指す寺院へ向つた。寺の名は往生院と聞いていたのだが、其処には幾つもの僧房が在るので其の名が分からないと相手は探せない。広大な敷地内を疲れて休みながら時頼の居る僧房をくまなく訪ね回つたが居なかつた。

諦めて帰ろうとした時に僧坊とは名ばかりの荒れ果てた小さな坊舎から経文を唱える声が聞こえてきた。それは紛れもなく瀧口入道の声である。

供の女中に「横笛が訪ねて参りました。変わられたお姿でも、もう一度、拝見したいと思ひます」と言わせると、さすがに瀧口入道も心がゆらぎ、障子の隙間から覗いてみると正しく横笛の姿が見えた。愛（いと）しきは募（つの）るが、此処でくじけては折角の仏道修行が挫折するので、同坊の僧に頼んで「此処には、その様な者は居りません。別の寺でしよう……」と言わせた。

横笛は情け無く恨めしくも思つたが、踏み込んで確認する訳にもゆかず、涙ながらに戻る他は無かつたのである。瀧口入道は同坊の僧に「此処は静かで念仏修行には良い所ですが、不本意ながら別れた女性が簡単に訪ねてくるようでは決心がゆらくので、お許しを頂いて何処かへ移ります」と言つて嵯峨を離れ、高野山に登つた。高野山では蓮華谷に在る清浄心院（しようじょうしんいん）に居たのだが、其れを知つた横笛が髪を下ろした（尼になった）と聞いたので歌を送つた。

そるまでは恨みしかども梓弓（あずさゆみ）

誠の道に入るぞ嬉しき
是に横笛も返歌をした。
そるとも何か恨みむ梓弓

引きとどむべき心ならねば
歌に込めた思いが積もり積もつて、横笛は奈良の法華寺（諸国に置かれた国分尼寺の総本山）に居たが程なく他界してしまつた。是を知つた瀧口入道は、迷いの心を断つて本心から仏道に専念したので父親も不孝を許し、人々から「高野の聖（こうやのひじり）」と崇められるようになった。

其の瀧口入道を小松の三位中将維盛が訪ねた。都に居た時（武士として宮廷に奉公していた時）には、無紋の狩衣に立烏帽子（六位以下の公務員の制服）で衣服の襟元を整え髪を撫でつけて、身なりを気にする華やかな男であつたが、出家した後初めて見た姿は、年齢が未だ三十にもならないのに瘦せ衰えた老僧となり、濃い墨染めの法服に袈裟を掛けて深く修行に徹した求道者（くどうしや）に変わつていった。維盛は、瀧口入道の姿を見て何とも羨（うらや）ましいと感じたのである。

瀧口の姿は、かつて晋（しん）紀元前三七六年の七賢人が世を避けた姿、或いは漢（かん）前漢、紀元前二百年頃）の四人の隠士が秦の始皇帝時代を避けて商山の竹林に住んだ有り様も是には過ぎ無いと思われれるほどであつた。

（続く）

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>